

『煤煙』研究

——「宿命の女」と「新しい女」——

一 木 朋 子

序論

一九〇八（明治四二）年三月、後に「煤煙事件」と呼ばれる奇怪な情死未遂事件が新聞に報じられた。女は美貌の女学生平塚明子、満二十二歳。後に婦人運動の先頭に立つ平塚らいてうである。男は夏目漱石門下の文学士であり中学教師の森田草平、二十七歳。この教養ある二人の情死未遂事件は多くの新聞に報じられ、その翌年の「東京朝日新聞」紙上を飾った森田の告白小説『煤煙』^{注1}の連載によって社会に大きな波紋を投げかけた。中でも作品中の女の与えた影響は強く、「常識を失い居るもの」「色情狂」と評される一方で、「新しい女」の出現としてその崇拜者が現れるという社会現象にまでなっていた。左記は明子の残した遺書である。

我が生涯のシステムを貫徹す

我がCauseによって斃れしなり

他人の犯すところにあらず

三月二十一日夜 平塚明

このように恋のためではなく、「自己」を貫かんが為めに死を選ぶのだという強い自意識を持った女性は、近代の女性のあり方に象徴的な意味を持つものとして受け止められた。このことから、小説『煤煙』は近代における男女の恋愛や女性のあり方を論じる際の参照資料としてしばしば言及されることになったが、小説それ自体を正面から扱った研究は少なく、むしろ漱石作品に与えた影響という面から論じられることの方が多かった。また、女主人公「朋子」についても後の「らいてう」の資料として研究されることが多かった。そうした中で近年、婦人運動家「らいてう」としてではなく『煤煙』にあらわれた限りでの平塚明子像に迫り、事件の実証的な探求の前身と漱石への影響について分析した研究として、佐々木英昭著『新しい女』の到来——平塚らいてうと漱石

―^{注2}』が出版された。私は主にこの研究を参考として『煤煙』とその成立に多大な影響を及ぼしたダヌンツイオ『死の勝利』における女性のありようの相違を説明していきたい。

「煤煙事件」は森田草平が小説『死の勝利』に心酔し、その実践を試みたとの見方もあるが、これら二つの作品は大変な類似性を持ちながら、結末において決定的な相違を示す。つまり、『死の勝利』が恋人達の心中で幕を下ろしたのに対して、『煤煙』では寸前のところで心中は失敗に終わるのである。私にはこの両作品の結末における相違が女性のあり方の違いに起因するように思われる。

『死の勝利』は十九世紀末ヨーロッパのデカダンの霧囂気を帯びたイタリアの小説である。ここに現れた女性とは、いわゆる「宿命の女」であり、無意識のうちに、その妖しい魅力で男の欲望を掻き立てついに破滅へと追いやるのだ。森田が世紀末ヨーロッパのデカダン文学に傾倒し、この『死の勝利』の実践を試みようとしたのなら、『煤煙』の女もまた「宿命の女」でなくてはならなかった。そのため、森田は半ば無理やりに朋子を自分にとっての「宿命の女」として創造していくのであるが、結局の所、朋子は決して森田の思いこみのままになるような女ではなかった。

こうした観点に立って本稿では『煤煙』が『死の勝利』の実践

を試みながらも結末において失敗してしまった必然性を女性のあり方に注目して解き明かしていきたいと思う。そこでまず、第一章において、爛熟をむかえた十九世紀末の西洋ロマン派文学における「宿命の女」が一体どのようなものであったかを論じた上で、その典型を『死の勝利』におけるヒロインに見出したいと思う。そして第二章では第一章で論じた「宿命の女」と朋子との関連性を論じた上でその違いを考察しながら「新しい女」が何をもち「新しい」と形容されるのかという命題を『煤煙』における朋子のうちに探りたいと思う。そして、「宿命の女」から「新しい女」へという女性のあり方の変遷が男女の恋愛関係にどのような影響を与えたかを論じることを通じて、近代における「自我」の意識の発達をもたらした近代人の孤独というものを明らかにしたい。

第一章 「宿命の女」

一 「宿命の女」の背景

一般に世紀転換期において顕著なのは「滅びの感覚と黙示録志向」^{注3}である。これは西洋キリスト文明の「終末論」の発想に関連するものと思われるが、十九世紀末の西洋人には世紀の終わりをヨーロッパ文明の終わりと同一視することによって、過ぎ去ったものへの愛情を強めたり、滅びゆくものに身をゆだねたりする精

神態度が見られた。世紀末とは元来は単なる時間軸上の境界線に過ぎないのだが、人々はそこに死と再生の隠喩をかぶせ、象徴的、歴史的な意味を投射するのである。^{注4}

十九世紀末は西ヨーロッパ全体が経済的な不況に襲われ、それまで抑圧を受けてきた労働者階級や植民地、そして女性が革命の脅威を絶えず突きつける時代であった。また、ヴィクトリア時代中期においては女性は「情欲がない」ものと一般に考えられていたのであるが、十九世紀末になって専門家たちが女性にも性的快楽をおぼえる能力が備わっていることを認めるなど、女性のセクシュアリティの定義は変化していく。

女性は昔から秩序を乱すもの、父権的な文化の外側にある正体不明の野生地帯の住人である、として恐れられてきた。^{注5} それゆえに、世紀の転換期に起きたこのような女性の経済的・性的な解放の兆しは男性を震撼させたのであり、女性は男性にとって脅威的な存在となっていたのだと思われる。

このような女性に対する意識は文学におけるヒロイン像にも大きな影響を与えた。すなわち、男を妖しい魅力で破滅させるといふ「宿命の女」が新しいヒロイン像としてクローズアップされるのである。「宿命の女」には一定のタイプはないものの、常に男性の客体として存在している。^{注6} つまり、「宿命の女」とは、あくまで

男性にとっての「宿命の女」であり、その女性自身として自立した存在ではないのである。これは第二章で述べる「新しい女」と大きく異なる点であるといえる。

また、グーウィニズム以降、ヨーロッパ各地において、自然は「無情かつ非情な機械」であり、宗教は「懐古的記憶」、愛情は「種を永続させるための生物的本能」でしかないという虚無的風潮が高まり、瞬間に生き、「新しいもの、貴重なもの、新奇なもの、洗練されたもの」を探求する唯美主義運動が全ヨーロッパを席卷するようになる。^{注7} イギリスではウォルター・ペイターがこの思想の祖となり、『ルネサンス』（一八七三）に「我らの唯一のチャンスは・・・所与の時間の中に可能な限り多くの脈動を取り込むことにある。偉大な情熱こそがこのはやる生の感覚をもたらししてくれる。・・・芸術のための芸術への愛が最も大切なのだ。というのは、芸術は過ぎゆく瞬間に、まさにその瞬間のために、最高の質を与えることを率直に申し出してくれるからだ」と述べているが、これら唯美主義者は自然的なものや生物的なもの全てを嫌悪し、人工性、想像力を好んで、さらに「美の欲求は死の意識によって強められる」とペイターが説いたように、死の観念を深めていくのである。

以上のような背景を考慮した上で『死の勝利』を読み進めてい

くと、そこには明らかに唯美主義の男とその男にとっての「宿命の女」が描写されている。では、『死の勝利』のストーリーを追うとともに、イッポリータがジョルジョの「宿命の女」となる過程を論じていきたいと思う。

二 『死の勝利』と「宿命の女」

『死の勝利』はこれまで二年の間、手紙のやりとりだけで愛しあってきた恋人同士のジョルジョとイッポリータが、ようやく念願の二人だけの生活を手に入れるところから始まるが、その発端場面は二人がたまたま自殺の現場を目撃するシーンで幕を開ける。最初から「死」の印象の強いこの小説は最後に至るまでその濃厚で強烈な「死」の印象を読者に与えるものであるが、それは「美の欲求は死の意識によって強められる」という唯美主義の主張がジョルジョに強く浸透しているからに他ならない。

イッポリータの唯一の願いはジョルジョに喜ばれることであり、全身全霊をもって恋人を愛している。左記はそんなイッポリータの言葉である。

私はあの人を愛し、私自身をすっかりあの人に捧げている。この二年間にあの方は私をつくり変えて一別な女にしてくれた。あの方は新しい官能を、新しい魂を、新しい心を私に与えた。私はあの方の創った物、あの方の手で出来たのだ。：

私はすっかりあの方のもの・・・

(一、「過去」四)

このように主体性を欠き、恋人の思いのままになるイッポリータであるが、これに対しジョルジョは絶えず嫉妬心と猜疑心を抱き、より確実で絶対的な愛を求めている。極端なエゴイストともいえるジョルジョは「彼女の眼には、私の外の何物をも見させまい。私から流れ出ない、あらゆる印象を受けさせないで置こう。私の言葉を他のどんな聲音よりも快く響くようにしてやりたい」という衝動に襲われるのである。

このように、恋人の全てを支配したいと思うジョルジョと恋人に全てを支配されたいと思うイッポリータの望むものは一致していたわけだが、それにも関わらず、なぜ二人は死ななければならなかったのであろうか。二人の死に至るまでの過程には外的に大きな事件となるものは存在しないため、ジョルジョのイッポリータに対する心情の微妙な変化にその原因を見出すより他はないように思われる。

ジョルジョは複雑な家庭環境に育ち、そのため絶えず死の衝動に襲われ、耐え難い苦悶の情に困惑している青年である。ジョルジョにとってイッポリータは、生の欲望へと駆り立ててくれる存在であり、ジョルジョはこれまでの不幸によって失われつつあつ

た人間性がイッポーリタとの愛の生活によって回復されるという希望を持った。

しかし、イッポーリタの官能的な美しさは誘惑に満ちていて、ジョルジョは彼女に対する情熱が自分を墮落させ、破滅へと導くのではないかと感じるようになる。「俗悪な愚衆の喧噪悲哀」から逃れるために恋愛に救いを求めたジョルジョであるが、今度はその恋愛によって自らの肉感的な獣性に直面することになり苦悩するのである。そして、ジョルジョはこのような苦悩から脱する解策として、より確実に絶対的な愛情を求めるようになるのであるが、こうした理想と、現実的な欲望の狭間で彼は一層苦悩することになる。その結果、次第に彼は自分の欲望を掻き立てるイッポーリタに敵意の眼差しを向けるようになった。そして専ら性的見地からのみ恋人を見るようになり、彼女の内に「快樂と放逸の道具」を「頹廢と死滅の道具」を見、「私はもはや彼女を愛しない！」と感じるのである。イッポーリタが健康で陽気に振舞えば振舞うほど嫌悪感を抱き、その性的魅力に抵抗できない自分の弱さを意識すればするほど、彼女に対する憎悪の情は強くなっていくのである。イッポーリタはそうした恋人の心情の変化に気づくことなく、変わらぬ愛情を恋人に捧げているのであるが、主体性を持たず、ジョルジョの欲望の対象として甘んじたために、いつの間

かジョルジョにとっての「宿命の女」となるのである。

こうして支配したはずの恋人に逆に支配されている自分を意識した時、ジョルジョはそこから解放される手段として「死」の固定観念に囚われる。左記はそうしたジョルジョの心情を表わす言葉である、

「……死ねば彼女は思想の対象に、純然たる理想になるだろう。不確実な、不完全な存在から、彼女は完全な、確実な存在に入るだろう——所有せんがために滅却する！恋愛の中に絶対を追求するものにとっては、これより他に道がない。」

こうしたジョルジョの苦悩に満ちた心理を最後までイッポーリタは解さなかった。とどのつまり、夜の岬に連れ出され、絶壁を目前にした時になって初めて全てを理解したのであったが、時すでに遅く、「人殺し！」と悲鳴をあげながら、二人は抱き合ったまま、絶壁の縁から転落するのである。

以上、『死の勝利』のストーリーを追うとともにイッポーリタの「宿命の女」性について論じてきたが、結局のところ、イッポーリタが「宿命の女」となるのは、彼女に対してジョルジョが人格を認めず、絶えず自己の欲望を喚起する対象として見ていたことに理由があると思われる。イッポーリタはジョルジョの目を通し

て「宿命の女」となったのである。それでは仮に女性が自らの意志を持った存在として男性の前に現れた場合はどうであろうか。主体性を持った女性に対しては、男性は自らの「宿命の女」という幻想を女性に抱けないのではないだろうか。そこで次に、確固たる「自我」を持って男性に向き合った「新しい女」のあり方を『煤煙』に即して検討し、その『死の勝利』との結末の差の必然性を探っていききたいと思う。

第二章 「新しい女」

一 「新しい女」の背景

通常「新しい女」の原型とされるのは、一八八三年、フェミニスト作家オリヴ・シュライナーによって書かれた小説「アフリカ農場物語」のヒロインである。^{注8}この小説は「子ども」や「人種」や「性」の抑圧を受けてきたヒロインが、それらの抑圧に対して意識と行動を持って立ち向かうというストーリーである。

それまでの女性とは「男性に見られる存在」であり、「太陽の光、すなわち男性の願望を参照する存在」と一般に考えられてきたのであるが、それが第一章で述べたような十九世紀末西洋における女性の社会的立場の向上や既存のセクシュアリティのあり方の変化によって、社会的にも性的にも男性同様に自由に振舞う「新し

い女」が出現し始めてきた。この「新しい女」の到来は伝統的な文化的価値を保持しようとする人々に強い敵意や恐怖の念を与え、当時のジャーナリストたちは「新しい女」たちのことを「文化をアナーキーな状態に追い込み、崩壊させようとする勢力に、誤って加わってしまった」者とみなし、叛乱や黙示といった言葉を用いて描写した。^{注9}

それは日本においても同様であった。それまで家父長制下での女性は、自己をもたないことを第一の美德とされ、女性は妻であり、母である以外の自己を滅却しなければならぬ状況にあった。しかし、日露戦争後の急激な社会変化と流入する西洋思潮の影響もあり、一九一〇年に入って、女性をめぐる状況は目まぐるしく変化していく。たとえば、一九一〇年の夏、坪内逍遙が早稲田大 学校外講演会で「近世劇に見えたる新しき女」を講じ、中世以後、男子に屈従してきた「女らしき女」は、「所謂退化せる女」であり、古代の女子の自然に返り、そこへ「相当の教養」を加えたのが、「自意識ある覚醒せる女」、「現代が要求する女」、つまり「新しき女」だとした。^{注10}この時に初めて日本で「新しい女」という用語が用いられ、その新語は、女性の自我肯定宣言をした平塚らいてうや「青鞥」社員の女性たちを中心に広まっていった。一方で、一九一〇年六月の「中央公論」の社論に「あくまで我が旧俗古風を

保守して、婦人は家居閉戸、家政を修め子女を養育して以て家庭の女王たるに止まるべし」と述べられるなど、「新しい女」の台頭に危惧する風潮が強くなりながら、女性を取り巻く社会状況は急速に変化していった。

従来 of 良妻賢母型の女性から逸脱したという意味においては、第一章で論じた「宿命の女」も広い意味で「新しい女」の中の一つと数えられるだろう。しかしながら、「宿命の女」においては、女性はまだ男性にとっての対象としてしか捉えられていないと思われる。そこで、私はここでは、「宿命の女」を客体的な存在、「新しい女」を主体的な存在と分けることで両者の違いを明確にし、その点に『死の勝利』と『煤煙』におけるヒロイン像のあり方の相違を見たいと思う。それでは次に『煤煙』の朋子に見られる「新しい女」像を見ていくとともに、『死の勝利』との結末の相違について論じていくことにする。

二 『煤煙』と「新しい女」

大学の講師である小島要吉は、「辛抱強い」だけで「何時迄話しても、別に変わった話の種子があるでもなければ、又一向談話も冴えない。……それでも子供だけは生む」妻に「物足らない」思いを抱いていた。西洋の世紀末デカダン文化に傾倒する一方で、それとは対照的な自分のこうした日常生活に絶望的な空虚さを抱

いていた頃、要吉は真鍋朋子に出会い、朋子の書いた小説「末日」^{注11}を読むに至って急速にこの、まさに世紀末を体現したような女性に惹かれていく。その小説のストーリーは、卒業を間近に控えた女学生が、自分について熟考した末、相愛の間であった男と断然別れ、行く先も告げずに信州のある女学校へ赴任して行くというものであった。要吉は何よりも「何と違って朋子がこんな事を書いたもの」か、ということが気になり、「何うもそんな経験があつて書いた物とは思はれぬ。そんな経験も無いのに、空想の上で、男を愛すると云ふことよりも、先ず男を棄てることを描いて居る女かも知れない」と考える。そしてその小説の感想を送るのであるが、ここから「世にも珍しい常識以前とも以上ともいえるような手紙—お互いに別々なかつてなことを考え、かつてな夢を描き、かつてな独り言をいっているような手紙が矢つぎ早に往復されることになる。」^{注12}

こうして始まった要吉と朋子の関係は『死の勝利』の場合と同じく、男性が半ば一方的ともいえるような虚像を女性に押し付けながら、その恋愛を芸術的なものへと昇華させようと試みる方向へと進んでいく。『死の勝利』に陶醉し、西洋の世紀末デカダンの風潮に傾倒する要吉は、朋子の言動の一つ一つを「宿命の女」的なものと解釈し、自らが創り出した朋子の幻影に翻弄されるこ

とになる。しかし、そうであるならば『死の勝利』と何ら違ひはないはずなのだが、イッポリータと違ひ、朋子にはあまりに不可解な言動が多かった。それゆえ、ジョルジョが既に恋人として得ているイッポリータに懐疑の念を持って苦悩したのとは違ひ、要吉は朋子から愛されているという確信が持てない上に、朋子という人間が一体どのようなものが分からず苦悩することになる。

要吉は朋子にイッポリータ的な「宿命の女」像を重ねて見るのだが、朋子はそのような相手による勝手な解釈は許さないと確固たる「自意識」を持つ女性であった。自分自身を「不自然」な存在であるといい、「ダブル・キャラクターに悩まされて居る身」であるという朋子に要吉は困惑する。

私は逆も熱い酒を盛る器ぢや無い。ダブル・キャラクターに悩まされて居る身は戯れにも左様いふ事は口外し難いのです。仮初に恋といふ字に唇を借すは、我理想とする恋の手前恥づかし、自他を欺くものなれば。恋とは純一無難なものでせう。自分を形造る幾億万の細胞の一つ一つが、等しきヴァイブレーションに燃えた時に名付けべきものでせう。

(十八)

このように自分の表面の「波瀾」と底辺の「潮流」との間の矛盾に自覚的であり、理屈で恋愛を語る女性は、男性に「愛」では

なくて「理解」を求めた。「真を申せば、私の世界には恋も愛も同情も皆無意義の文字に過ぎない。残れるものは只理解と云ふことだけ」と語る朋子であるが、恋人に「理解」を求めると「愛情」を求めるとでは大きく異なる。すなわち「理解」を求めるといふことは、自分のオリジナルな人格を認めて欲しいということであり、相手の男性から独立した存在であることを主張していることになる。この点において既に朋子は、男性にとっての「宿命の女」を逸脱しているといえる。男性に幻想を抱かせる隙を与えず、あるがままの自己をそのまま理解させようとするのである。自意識の強い朋子には恋愛は他から与えられて同化できるものではなく、あくまで「自分」を持ったまま、互いに融合することなく理解し合うということが不可欠であった。朋子にとって恋愛の確実性は、まず自己と他者との境界線を明確にしたところから始まるのであり、「若し先生の世界が私と合致したならば」喜んで自分の世界の扉を開いて迎え入れよう、というのである。このような朋子の態度に要吉は屈辱を感じながらも一層心惹かれていく。それはもはや女を愛するがゆえではなく、決して自分のものにはなろうとしない女に対する「復讐」心と忘れられない「悦楽」を再び得たいという心情ゆえであった。

「宿命の女」と「新しい女」の決定的な違ひは男の客体として

生きるか、主体的な生を貫くか、というところに尽きると思われるが、それは結局、「性」を介在するかどうかに関わることではないだろうか。女性が自立した存在として生きていくためには、まず、「性」からの解放が必要だったと私には思われる。『煤煙』の朋子が「私は女ぢやない」と要吉に言ったのも、「性」からの解放を意味したものと思われる。要吉はこの言葉を文字通りに受け止め、それをセクシュアリティの欠損の告白と考えたのであるが、朋子自身は自分を性的区別を超越した「女でも、男でもない、それ以前のもの」として表現したのである。

しかし、要吉は朋子の言葉の真意を誤解したまま、自分たちの運命と恋愛に一層悲劇的なものを見出していくのである。要吉は朋子の「背後に潜む黒い影」に自分と通じるものを見出し、たとえ愛し合うことが不可能であるとしても、互いに同じ「呪われた運命」の中で悲劇的に生きることを望んだのである。ところが、依然、朋子は自分の世界をどこまでも自分一人で生きていく姿勢を貫くので、要吉は力づくでも朋子の気持ちを自分に向けさせようと決心する。それはいつまでも自意識を保ちながら男の愛を受け入れようとしない女に対する「嫉妬心」のようなものを含んでいた。

「貴方は私を愛するんだ、愛せずにはゐられない。」

要吉は執拗く繰り返した。

「私覚悟しました」と、朋子は始めて口を聞いた。手早く包みの中から短い小刀を取出して、要吉の手に握らせた。

「これで何処でも可いから、私の肉を裂いて――血を吸って下さいまし。それより外に兩人が一つになる道はありません。」

(二十四)

無理にでも女の気持ちを動かそうと半ば自暴自棄になって激しい愛の告白をした要吉であったが、朋子の自意識の強さはそれをさらに上回るものであった。朋子はぶつけられた要吉の欲望に対して具体的に「肉を裂いて血を吸う」ことを提案した。それは、どうしても自意識を棄てて相手の世界に飛び込むことができない女がせめて男の要求を受け入れようとする一つの妥協案に他ならないが、勿論、要吉の望みに応えるものではありえない。それでも、要吉は報われぬこの恋愛になお諦めがつかず、最後の決着として、悲劇的で芸術的な死を望むに至る。愛し合うことが不可能だと分かった今、要吉にとっては、二人が同じ理由のもとで死を迎え入れることだけが最後の望みとなるのである。

「私は死ぬる。貴方と同じ理由でなら死に得る。併し貴方は貴方のために死に、私は私のために死ぬ。そんな事は逆も堪へられない、そんな事ぢや逆も死ねない――」

(二十四)

ロマン派的恋愛観に傾倒していた要吉にとっては、二人が「同じ理由」のもとに「死」を迎え入れることが必要であった。要吉には悲劇的で、芸術的な「死」こそが必要であつて、単なる意味のない「死」は堪えられないことであつたのだ。しかし、朋子はまたも要吉の幻想を打ち砕いてしまう。朋子は自分以外の全てのことに「インデファレント」になつた結果、「死」に興味を抱くようになつたと言ひ、あくまで自分は恋のために死ぬのではない、という姿勢を貫こうとする。要吉が究極の愛としての他者との合一という幻想の中に芸術的な死を思い描いたのに対して、朋子はそうした幻想を排し、極限まで自己一個を追求した果ての現実として「死」を見つめるのである。

過剰な自意識を持つ朋子は、情熱に駆られるごとに「私は負けた」と言ふ。こうして自意識と欲望との必死の闘いを孤独に続ける朋子は、「死」のみが自意識を貫く最後の手段と見極めるのである。このような朋子を目の当たりにし、要吉は「愛はこの女に取つて勝利でなうて敗北である」と感じるのであるが、「殺して頂く」と朋子に言われて「私は殺せる、貴方なら殺せる」と僅かな愛への望みを持つて雪深い塩原へと向かう。

つまり、この時点で要吉は半ば成り行きに任せた状態で心中を決意するのであり、朋子が自分を「愛している」と言つてくれさ

えすれば、我を忘れて「死」を迎えることができるような気がしていた。だが、結局最後の最後まで、朋子は「愛している」といふ一言を口にするのではなく、要吉はここに来て絶望的な朋子との距離を実感するのであつた。そうして全ての幻想が打ち砕かれたところで、要吉は突然、持っていた短刀を取り出して谷底目がけて投げ捨て、「私は生きるんだ。自然が殺せば知らぬこと、私はもう自分ぢや死なない。貴方も殺さない。」と一方的に言い放つ。こうして、朋子を滅ぼすことも、朋子から滅ぼされることも出来ないということ、この結末場面において要吉は強く実感して『煤煙』一篇は幕を閉じる。

結論

『煤煙』の要吉が『死の勝利』の実践の試みに敗れたのは結局、要吉が朋子を自分の観念中に存在するものとして捉えきれなかつたところにあるといえる。イッポーリタがジョルジョの中に無意識に巢食つてジョルジョを苦悩に陥れたのに対して、朋子は最後まで要吉との距離を保つことで要吉を苦悩に陥れた。朋子は要吉に会う以前から確固たる自意識を持つ女性だったのであり、要吉はジョルジョがイッポーリタに行つたよつに朋子を自分の思いのままの女性に創り上げることはできなかった。しかし、それでも

要吉は朋子に幻想を重ね、朋子が自分と同じ世界に生きてくれることを願った挙句に破綻に至ったのである。

『死の勝利』がジョルジョの内部における欲望と理想の闘いであったとするなら、『煤煙』は要吉と朋子との自我と自我との闘いであったといえる。ジョルジョが自分の内部の葛藤に苦悩したのであって、要吉は自分と朋子との間で苦悩したのである。つまり、イッポーリタがジョルジョの内部に組み込まれた客体として、ジョルジョを破滅へと追い込んだとすれば、朋子はあくまで主体的に、要吉の外に自立して向き合い、要吉を追いつめたのだといえる。

一方、この関係を朋子の側から見るとどうだろうか。朋子は、どこまでも自分は自分のものである、といった強い意志の持主であり、恋人に「愛」ではなく「理解」を求める。「愛している」と一度も口に出さず、接吻のほかを拒んだ朋子は、結局、最初から最後まで自意識と闘ってきたのである。要吉が朋子に悩まされたのに対して朋子は自分の自意識との闘いに悩まされてきたといえる。このように考えれば、朋子にとって要吉は一人の個人というよりは、自分の自意識を揺さぶるものとして存在していたのではないかと考えられる。これではジョルジョにとってのイッポーリタと同じである。

「新しい女」である朋子は、「宿命の女」のように男の客体となることを強い自意識を保つことによって免れるばかりでなく、逆に男を自分の客体として捉えていたように思われる。これを要吉の側から言うなら、要吉には朋子の客体として朋子の中で生きるか、全く別々の世界で生きるかしか選択肢がなかったのである。

「宿命の女」と「新しい女」。どちらも男性側の視点で捉えられたものであるが、前者が男性に吸収、同化されているのに対して、後者は男性から独立しているといえる。客体として生きるか、主体として生きるか、という違いであるが、では、このように主体的に自分の生を生きようとする「新しい女」の出現は男女の恋愛のあり方に、一体どのような影響を与えたのであろうか。

長い間、女性は男性との相対的な関係のもとで捉えられていた。それは『旧約聖書』の「創世記」においてイヴがアダムの骨から作り出されたとされていることから認められる。人間とは男性であり、男性は女性をそれ自体としてではなく、自分との関係において定義してきた。つまり、男性は〈主体〉として、また〈絶対者〉として存在し、女性はそのような男性にとっての〈他者〉として位置付けられてきたのである。すなわち、「女性は長い間、男性から自分を〈他者〉として受け入れるように強いられる世界の中で自分を発見し選択しなければならなかったものであり、

男性は女性を客体として固定し、内在にとどめておこうとした」のである。^{注13}

しかし、「新しい女」は男性の内在としてでなく、男性と対等の人間として存在する。「新しい女」は女である前に一人の人間であることを望んだのである。男性の相対的な存在ではなく、男性同様に絶対的な存在として生きるのである。このように男女が共に絶対的な存在となった時、男女の恋愛のあり方に変化が生まれるのは当然だろう。

現代では女性は男性と同等の権利を持ち、自己主張できるようになった。このような女性の「自我」の意識の発達は必然的に「男女の恋愛における神話の崩壊」^{注14}をもたらした。すなわち、男性は女性に幻想を抱くことが出来なくなり、「人間は終に一人だ」という要吉の言葉通り、他者との融合の可能性が失われたのである。

こうして恋愛によって男女が融合するという可能性が消失したとすれば、男女の間には互いの差を理解し合うことしか残らないことになるが、私はここに近代人の苦悩を見るような思いがする。すなわち、分析的理性を持つ近代人は、他者との全的融合という恋愛の理想が「幻影」に過ぎないものであると気がついてしまい、「自己」と「他者」、「虚構」と「真実」といったものを峻別せざるを得ないにも関わらず、なおかつその恋愛神話を求めてやまない

のだから。

注

注1 森田草平の小説。初め「煤烟」と題し、明治四十二年（一九〇九）一月一日より五月十六日まで、断続九回の休載をさみつつ「東京朝日新聞」に連載。

注2 佐々木英昭『「新しい女」の到来』（一九九四年、名古屋大学出版会）

注3 フランク・カーモード『終りの意識』（国文社）

注4 E・ショウォールター『性のアナキー』（二〇〇〇年、みすず書房）

注5 E・ショウォールター『性のアナキー』（引用は『Toti Moi: Sexual/Textual Politics: London and New York: Methuen, 1985』）

注6 松浦暢はそのような多様性に満ちた「宿命の女」の認識のうえで著書『宿命の女』（一九八七年）の中で実験的に「宿命の女」を次のように大別している。すなわちそれは（A）地上型、（B）下降型、（C）昇華型であり、（A）は人間、妖精を主体にした純情タイプで、愛のために自らを犠牲にして他者愛に生きる「宿命の女」、（B）は愛するものを破滅させても自己愛を貫く悪女・妖婦タイプの「宿命の女」、そして（C）では地上をはなれて、愛を天上にまで昇華させ、「宿命の女」を不死の神にまで求める（1）女神型と、理想の女性像をアレゴリカルに表現する（2）抽象理念型の「宿命の女」として分けている。

注7 E・シヨウォールター『性のアナキー』(引用文はJean Pierrot, The Decadent Imagination)

参考文献目録

注8 ギルバートとグーバーによれば、『アフリカ物語』は、「新しい女」の原型を描くことによって、世紀転換期におけるフェミニズムの知的基盤と、レトリックとしての言葉遣いを確立する役目を果たした。(Gilbert and Gubar, Sexchanges)

注9 E・シヨウォールター『性のアナキー』(引用はLinda Dowling, "The Decadent and New Woman", Nineteenth-Century Fiction 33, 1979)

注10 『逍遙全集』第八卷(春陽堂、大正十五年へ一九二六)初刊。第一書房、一九七七年復刻)

注11 このテキストは未発見だが、明子自身の記憶によれば、ストーリーは空想によったものの、女主人公は「勿論或程度迄自分を書いて見た」ものであった。(平塚らいてう『峠』、「時事新報」大正四年四月一日―二十一日連載)

注12 平塚らいてう『わたくしの歩いた道』(新評論社、一九五五年)

注13 ポーヴォワール『第二の性』(井上たか子、木村信子 監訳、一九九七年、新潮社)

注14 佐伯 順子『色』と『愛』の比較文化史』(岩波書店、一九九八年)

- ・『煤煙』森田草平(一九三二年、岩波文庫)
 - ・『死の勝利』グヌンツィオ(野上素一訳、一九六三年、岩波書店)
 - ・『新しい女』の到来』佐々木英昭(一九九四年、名古屋大学出版会)
 - ・『宿命の女』松浦暢(一九八七年、平凡社)
 - ・『新しい女たち』の世紀末』川本静子(一九九九年、ちすず書房)
 - ・『性のアナキー』E・シヨウォールター(二〇〇〇年、みすず真房)
 - ・『第二の性』ポーヴォワール(一九九七年、新潮社)
 - ・『青鞥の時代』堀場清子(一九八八年、岩波新書)
 - ・『色』と『愛』の比較文化史』佐伯順子(一九九八年、岩波書店)
 - ・『元始、女性は太陽であった』平塚らいてう(一九七二―二年、大月書房)
 - ・『平塚らいてう』小林登美枝(一九七七年、大月書房)
- (いちき ともこ) 二〇〇一年日文学卒)